

# 今日 つれづれ



神戸 陸史（ハウゼコ）



日曜夜9時からのドラマ「陸王」の視聴率が好調だ。ジリ貧の斜陽産業である老舗中小企業の足袋屋「こはぜ屋」の4代目が、一発逆転を狙って競技シューズ作りにチャレンジする話だ。メインバンクの担当者から、足袋だけではジリ貧なので新規事業を興すべきと進言され、競技シューズに進出することを決めた矢先に、銀行から運転資金の融資中止を通告され、そこからいばらの道が始まる。素材の特許が大企業に押さえられそうになったり、大量受注に成功したタイミングでベテランの職人が倒れたり、製造機械が故障したり、開発者が怪我をして生産が出来なくなったり……。しかし工程の重要な部分は、頼りなさそうな女の子がカバーをし、開発者の仕事は、これまた頼りなさそうな社長の息子がカバーをする。2人ともいわゆる負け組だったが、このプロジェクトで大活躍する。初めて社会から自分たちが必要とされる状況になり、過酷な状況でありながら生き生きと働く。このドラマは良くできていて、中小のメーカーの後継者の直面するシチュエーションを、見事に描いている。このままでは必ず衰退することがわかっていても、新規事業への進出には沢山のお金と人的資源が必要で、二の足を踏む場合が多い。仮にそこがうまくいっても、特許や商流、資本力で負けてしまう。そこを打開するには、情熱と運しかないというところかもしれない。

この話を先日、ある大学教授と話した。その大学教授の父も、こはぜ屋と同じような20人位の中小メーカーを経営していた。しかし、中小企業に入るのがいやで、研究の道に進み大学教授になった。学生時代、社長だった父に「こんな仕事やめちまえ！」と言った。しかし、父の心情は、このドラマのように様々な苦悩と葛藤していたかと思うと、胸が詰まります。父の事を全く理解していなかったと話していた。経営者は、会社の状態が悪くなくても誰にも相談できない、孤独な職業だ。ドラマは、テレビの中だけでなく、身近なところにもあった。